

# EVENT REPORT

当ホール主催の公演・講座の雰囲気をおみなさまに発信する「ボランティアライターズ」の方によるレポートをお届けします。

平成28年  
8月7日  
[日]

青葉の森公園  
芸術文化ホール  
イベント  
レポート

ホームページ

<http://www.aobageibun.com/>



## 青葉寄席

あおばよせ

出演  
落語  
古今亭 志ん輔

落語  
柳家 三之助  
(千葉県銚子市出身)

落語  
柳家 吉緑  
(千葉県東金市出身)

浪曲  
玉川 太福  
(千葉県大学法経学部経済学科卒)

曲師  
玉川 みね子

千 葉にゆかりの噺家を招いての「青葉寄席」。私は、昨年

に続き2回目の鑑賞である。東金市出身の柳家吉緑さんの落語(「真田小僧」)は、父と息子の軽妙な会話、ませた子どものセリフ回しに思わず笑ってしまった。銚子市出身の柳家三之助師匠は、酒呑みが御座敷でひと騒動起こす話(「棒鱈」)で、本当に酔っぱらっているかのような話し方が見事だった。ト리는古今亭志ん輔師匠。以前NHKの「おかあさんといっしょ」という番組に出演していたのを覚えているが、だいぶ貫禄がついた。内容もお笑いというよりも人情もので、親子の情がしみりと伝わってくる落語(「子別れ」)だった。

話は前後するが志ん輔師匠の前に演じた浪曲師の玉川太福さん。去年は古典だったが、今年は「自転車水滸伝」という新作浪曲を披露してくれた。舞台は自身が住んでいる荒川区。乗っていた自転車

壊れたが人情に篤い大家さんがアレコレと助けてくれた実話を元に創作したとか。とても聞きやすく会場は笑いに包まれた。また、浪曲は途中で拍手する場面があり、そのタイミングについて一緒に練習したのも楽しかった。

落語にはいわゆる「話のオチ」があるが、浪曲にはなくて、盛り上がったところで「ちょうど時間となりました、続きはまた次回・・・」と終わる。今回も、度々壊れながらもその都度復活した太福さんの自転車が3か月後に何かの不運に見舞われるというところで終わり、続きが非常に気になっているところである。

落語も浪曲も大がかりなセリフなどはないが、言葉の力だけでこんなに豊かな世界を繰り広げられるのだとあらためて感心した。リズムミカルな語り、絶妙な間合いは聴いていて心地よいし、観客それぞれが想像力をもって内容を広げることが出来る。プレトークで「初めて落語を聴くにあたって心構えは？」という質問に対し、吉緑さんは「何の予備知識もいらない。面白ければ笑ってもらえばそれでいいんです」と答えていた。また、太福さんは「日本人のDNAに入っているから、ただ聴けば心に沁みていくはず」と言っていた。なるほど、そうかもしれないと思った。

ボランティアライターズ 伊藤 正子

近年漫画の「昭和元禄落語心中」のアニメ放映や小学校の教科書への採用などで、若者が寄席に足を運ぶという落語ブームが到来している。今年も落語と浪曲の「青葉寄席」が青葉の森公園芸術文化ホールで開催されました。開演前には千葉県にゆかりの深い、浪曲界と落語界の次世代を担う玉川太福さんと柳家吉緑さんによるプレトークが行われ、自己紹介を兼ねて「この業界の門をたたいたきっかけ」を

織り交ぜながら、軽妙な掛け合いで会場の雰囲気をおふたりを二気に和ませるおふたり。



本舞台ではこのお二人の若手ながらのフレッシュな芸をはじめ、柳家三之助師匠と古今亭志ん輔師匠が古典落語の代表作「棒鱈」と「子別れ」で来場者をうならせる。隣席の来場者からは「同じ作品であっても演者によって異なる作品に思えるのは、落語の魅力であり、生ライブの魅力だよな」の声。高座に上がって羽織を脱ぐしぐさから演目が始まり、声を発した瞬間から江戸の粋な香りを漂わせ、会場を気に江戸時代へとタイムスリップ。師匠方の落語をいつまでも聞いていたいと思ったのは私だけではないかもしれません。

ボランティアライターズ 松永 智子

古今亭 志ん輔



玉川 太福



柳家 三之助



柳家 吉緑



写真/ボランティアカメラマン 田邊 定行